第２部　私のサッカー人生

戦中、戦後に闘魂を持ち続けて

須賀さんは戦中・戦後の東大サッカーの象徴的存在である。太平洋戦争が始まった直後に東京帝国大学に入学し、大戦中の関東大学リーグで優勝、戦後は現役とＯＢの混成による「東大ＬＢ」で全日本選手権に優勝した。1967（昭和42）年から７年間、東大サッカー部監督をつとめ、東大を基盤にしたクラブチームの御殿下クラブを創設、東大LB会会長を務めた。後輩が敬意をこめ呼ぶ「東大サッカー・ＬＢのオーナー」に戦中、戦後のサッカーと東大のサッカーのあるべき姿についてお聞きした。

2007年5月24日、銀座交詢社で
（2008年10月6日に須賀さん自宅で補足インタビュー）
（きき手）小山冨士夫、梅村洋、高橋一修、手島直幸＝文責

須賀敏孝さん　2008年10月撮影

名門中学から名門高校へ

―― 須賀さんは上野公園のすぐ近くにお住まいですね。もともと東京のご出身ですか？

父が明治35年上野公園下で鳥料亭を開き、洋食店、中華店と持ったが、大正12年の震災で消失、そのときの話で、いち早く仮屋を建て、親子丼を50銭で売り出して成功したと聞いている。また創業明治39年の「山下」も他の一族も、震災、戦災と難に遭った。私は大正11年上野桜木町寛永寺前の家で生れ、養子に入るまで住み、大学もここより通学していた。

兄弟は11人だが2人夭折したので9人、ぼくは6男で、幼稚園は御茶ノ水女子高師附属、小学校は慶応幼稚舎だったけれど、中学はおやじが「苦労させなけりゃいかん」ということで、慶応には進ませないで、公立の府立五中（現在の小石川高校）に行かせた。それがサッカーとの縁のはじまりだ。

―― 五中はサッカーの盛んな中学だったのですね。

五中では1年のときは水泳をやっていた。神宮プールの大会で足を痛め、蜂窩織炎（ほうかしきえん）と医者に言われた。それで水泳はやめた。興味のあるのはサッカーしかなかったので、2年からサッカーを始めた。東京都低学年大会（2年生までの年齢制限）にサイドハーフで出て優勝した。本郷中学のグラウンドで3試合くらいやって決勝だった。中心メンバーには、後に東大に進んだ本城治彦、中村勇二、吉田滋がいた。ぼくは4年5年はゴールキーパーをやっていた。五中の先輩で、当時東大生だった大内弘さんがコーチで来てくれていた。このころは豊島師範や青山師範が強かった。師範学校は小学校の高等科から行くので年齢が2歳上だ。2年の差はこの年代では大きかった。試合で相手から「坊やあぶないよ」といわれて悔しかった。

大内さんには、その後も、さんざん世話になった。金があったわけではないので大変だったと思う。帝劇に連れて行ってもらったことがある。1円もってこいと言われてついていくと3階席が学割で50銭、日比谷の山翠楼で50銭の中華ランチというぐあいだった。後の話になるが、父がやっていた中華料理屋で、大内さんが見合いをした。

須賀君どう思うと言うから、責任持たされちゃかなわんから、大内さんがよければいいんじゃないですかと答えた。

――高校（旧制）もサッカーの強かった水戸ですね。

親元から離れたかったので、東京の高校を受けないで、茨城県の水戸高校を受験した。文科乙類に入った。旧制高校では全員寮生活で、なにか運動部に入らなくてはいけない。先輩に誘われてサッカー部に入った。最初はゴールキーパーであとからセンターハーフをした。水戸高校では五中の先輩がレギュラーに５人いた。のちに東大に行く木村栄一さんなどがいた。

そのころは六高、一高、松山高が強く、水戸高校は強くなかったが、過去には全国優勝２回の歴史があった。大先輩に種田（おいた）さん（種田孝一、昭和13年東大卒）がいる。当時の中学は５年制だが４年修了で高校を受験できた。種田さんは五中四修で水戸に行って、東大に入って１年のときにベルリン・オリンピックの日本代表選手になった。種田さんがいたときは強かったと聞いている。昭和７年の高校大会全国優勝のころだ。種田さんからの逸話だが、ベルリン大会のときスウェーデン戦の前夜キーパーが酒を痛飲して、当日調子が出て３対２で勝ったと聞いた。ベルリンで３バック制を覚えて日本に持ち帰ったそうだ。種田さんとは戦後朝日招待大会に、いっしょにでた。私はそのときはゴールキーパーをやったのだが、後ろから見ていてうまい人だなと感心した

戦後の東大で活躍した水戸高校出身者には、大埜正雄、海老原純・朗兄弟、馬渡一真がいる。馬渡はキーパーだった。

水戸高時代、菅平合宿

東大に入学した頃

太平洋戦争中のサッカー部

――東大に入ったのは戦争中ですね。

入学は昭和17年４月。太平洋戦争が始まって間もなくだったが、理科系は徴兵延期になる。それで高校の文科からでも受験できた理系の農学部林学科へ進んだ。入学して次の年からは文系からの受験は出来なくなった。

東大に入学したとき、御殿下グラウンドに行くと（水戸高先輩の）木村栄一さんから、「明日試合があるから出て来い」といわれ、道具をもっていないまま、サッカー部に入って試合をした。フルバックだった。部室は御殿下の地下にあった。

キャプテンは１年のときが、のちに代議士になった天野公義（昭和17年卒業）、２年のときが松山高校出身の奥島雄次郎（昭和18年卒業）、３年のときは、医学部の加藤信幸（昭和19年卒業）だった。監督は竹腰重丸さん（ノコさん）だった。

竹腰さんはふらっとやってきてフォーメーションのことなど、いろいろなことをいわれた。竹腰さんが監督として作戦指導をしたようなことは、あまりなかったが、一度だけ神宮でやった早大との試合で、相手がフォワードを４人にしてきたとき、ハーフタイムにノコさんの指導で３バックを４バックに切り替えた。つまりLB木村、CH加藤、

RB 大貫の３バックだったのを、相手フォワードをマンツーマンで抑えるためにＲＨ須賀とＬＨ奥瀬を下げて、左から須賀、木村、奥瀬、大貫の４バックに変えた。CH 加藤は中盤の守備的位置にあげた。これはうまくいって１－０で勝ち、リーグ戦優勝をきめた。早大には加納がいたときだ。

――戦争の影響は？

農学部だったので、3 分の１くらいは、北海道、樺太、知多などの演習林へ実習に行っていた。わたしは戦争の影響はあまりうけなかったかもしれない。

瀬戸の演習林で測量の実習があったとき、砂防の先生に部屋に来いといわれていってみると、「明日試合があると聞いたが、君は出なくていいのか」という。「出たいけど単位取れなくなりますので･･･」というと「それは何とかするから帰れ」というので名古屋から汽車に乗って東京まで帰って、試合にでて、とんぼ返りした。昔はああいう先生がいた。

――そのころ東大は強かったんですか。

強かった。旧制高校でセンターハーフをやっていた須賀、木村、加藤、大貫、奥瀬をバックにならべて、フォワードにも三上、天野、吉田（矢島）、奥島、渡辺など精鋭揃いだった。ゴールキーパーは近藤健男（昭和 19 年卒業、のち三菱商事社長）で、愛称デバだった。いまでも覚えているのは、早稲田との試合で加納がドリブルで攻めてきてシュートしたのをデバが「いい球！」といって舌をペロっと出して、とった。その球をハーフラインあたりまで投げたところ、センターフォワードの大谷四郎（昭和 17 年卒業）さんが、ちょこんと触って、前に出ていた相手 GK 越しにシュートした。それが入った。デバは「あれは俺のゴールだ」といばっていた。

土浦航空隊時代

このころのサッカーは今のサッカーとは大分違う。左ウイングをやっていた三上（一郎）なんかは、「バックはボールをとったら、ウイングの向こうのコーナーフラッグめがけて、でかく蹴ればいい」といつも言っていた。最近のサッカーではよく見るバック・パスなどはほとんど見られなかった。あのバック・パスというのは気に入らないね。意味のないバック・パスは選手の休む時間が増えることになる。現役のサッカーをみていて、タックルがわれわれのころのとは違う。予測してタイミングよくボールをとるタックルができないものか。

あのころはレギュラーの人数が少なかった。大内さんのころは 11 人ぎりぎりで試合の前にゼミを回って選手集めやっていたという。我々のとき、部員は 15 人くらいだったろうか。

新しく第 2 工学部が出来て校舎は千葉の方だったので、第 2 工学部の部員が授業を終わって、千葉から来るのを待って、全体練習は 5 時か 5 時半からやっていた。

戦争が激しくなって昭和 19 年 9 月に 2 年半で繰り上げ卒業することになった。19 年はリーグ戦もなく部活停止になった。卒業式はなかった。

農林省林野庁に就職を決めて、徴兵検査。体格が良いからということで陸軍横須賀の重砲入隊通知が来たが、海軍技術士官の申し込みに急いで行ったところ「死ぬのが怖いのか」といわれ、海軍航空隊に予備学生として入った。弟が五中をでて予科練にいた。3 番目の兄が予備学生飛行隊長中尉でいたので 3 兄弟が（土浦に）集まった。その後、各地を回っているうちに少尉に任官した。終戦時は福井三国航空隊にいて、中尉で復員した。

――戦後は東大ＬＢで活躍されたのでしょう。

戦争が終わって農林省林野庁に勤めはじめた。当時大学院にいた三上一郎（昭和 19 年卒業）か

ら呼ばれて、全東大のチームでプレーした。昭和21年全日本大会で全東大は全慶応と決勝戦だった。この試合は勝ったが、自分としてはサッカーをやめようかと思った試合である。センターハーフをやったが、相手のセンターフォワードがドリブル抜いていくのを、けんめいに追いかけても追いつかなかったからだ。このときの祝勝会は場所もないので、(サッカー用具店の)ミクニの２階に、１升ビンを持ち込んでやった。このときのメンバーは大貫雅敏さん、横山陽三さんなど。ほかに関西でやった朝日招待にもでた記憶がある。

林野庁には昭和28年まで９年間いた。林野庁時代21年ごろ、ＧＨＱ（占領軍総司令部）の天然資源局（Natural Resources Section）というセクションに連絡員として任命されたとき、ＧＨＱの地方の営林署視察を企画、同行してＧＨＱの中佐を温泉に連れて行って接待したこともある。東大の恩師が役所に来たとき通訳したりした。経済科学局（Economic & Scientific Section）に予算折衝に行ったら五中の先輩の佐竹さんがいて予算を全部認めてくれた。

林野庁をやめてから叔母の家に養子で入った。養子先の料理屋「山下」で働き、昭和31年に結婚し女子２人誕生。「山下」を経営し、平成13年に店を閉めた。

東大サッカー部監督として

――昭和34年に東大の監督に就任されたときのいきさつは？

大埜さんが日産化学に勤めていて北海道に転勤なのであとを頼むと店に来た。養子で入っていたので、先代（実父の妹）が厳しくて、車の運転はだめ、ゴルフもだめと店以外のことをやれなかった。御殿下グラウンドに行ってサッカー部の様子を見るなど全然できなかった。昭和31年に２部に陥落したことすら知らなかった。たずねてきた大埜の話をきいて監督を引き受けた。大埜は水戸高の後輩で断るわけにはいかなかった。大埜は高校に入ってきたとき足が速そうだからウイングをやらせたら全然だめだった。だけど、のちには全日本の代表選手になった。彼の指導で東大のFWは強くなったのじゃないか。

――監督就任してすぐ優勝ですね。

監督になった昭和34年４月に梅村（洋）たちが新入生で入ってきた。その期の４年生のキャプテンは最初安達（良英）だったが、病いとかで小山（冨士夫）に代わった。

その年、２部で優勝した。リーグ戦の優勝決定戦の試合には、大内さんも応援に来て、服部（一郎）を出せというので出したら、服部のコーナーキックを山本（修）がきめて日大に勝った。監督の力がどれくらい影響したものかな。安達や小山の統率力があったから優勝できたのではないか。

梅村が４年生のとき(昭和37年度)も優勝した。一部との入れ替え戦の法大戦は０－１で惜しい試合だった。キャプテン梅村がしっかりしていた。３年生に安達二郎、後藤雅治、小川肇、南忠夫、２年生に畔柳信雄、石光豊、川瀬隆弘などうまい選手がいた。

――ＯＢから「1部復帰」という命題を与えられたのですか。

いや、そんなことは言われなかったし、学生にも言わなかった。やるべきことをきちんとやっていればよいと考えていた。梅村が４年生のときだって何も言わなかっただろう。あのころ岡野(俊一郎）などがドイツから紹介したクラマーの近代サッカー理論を梅村などは勉強していたようなので、監督がなんか言っても受け付けなかったかもしれない（笑)。若手OBの浅見（俊雄）は体育の教官だったからサーキットトレーニングとかを教えていた。

――監督と現役の関係というのはどんなふうだったのでしょう？

ああしろ、こうしろとは言わずにただ見ているだけだった。試合するのは選手なんだから選手が自発的に動かなくてはどうしようもない。監督になってからは、ほとんど毎日グラウンドに行っていた。忙しくて行かなかったときに、梅村がやってきて「私はキャプテンをやめます」という。聞くと、みんなが言うことをきかないので怒って練

習を中止して監督に話しに来たという。そんなことがあった。

―― あのころは、入れ替え戦のときなど先輩が選手起用に意見を言うので、防波堤の役割を果たしていただいた。どうして監督をやめたんですか。

7年やってきて、あまり長くやっていてはいけないと思った。長いことやっていると必ず弊害が出てくる。

―― ＯＢによる「御殿下クラブ」を設立したのは昭和38年ですね。

東大サッカー部昭和38年卒業の梅村、中村（紀雄）たちがやってきて、昭和38年の冬につくった。東京都クラブ・リーグというのがあるというので、それに参加しようということで参加してすぐに優勝した。最初のころは御殿下クラブの試合に竹腰さんや岡野もでていた。私も最初は監督兼プレーヤーだった。あるとき藤沢での試合で目の上を切って出血して病院で治療受けてからグラウンドに戻って試合にでた。11人ぎりぎりでやっていたので、立っているだけでいいと中村に言われた。

いわゆる草サッカーのクラブばかりだから、多少とも本格的にやった東大OBのチームは簡単に勝てた。それで5シーズン中4回優勝した。昭和42年に実業団大会で勝ち、昭和43年関東リーグにあがった。甲府、日立などと対戦した。よくやったと思う。関東一部は昭和43年1年だけだったか。その後、44年卒が御殿下クラブに1人も入ってこなかったので、京大、日大など他大学の人を入れたのだが結局数年して人が集まらず消えてしまった。

東大を出たのが大企業でサッカーをやることができるようになったので、新規要員補充ができなくなったわけだが、御殿下クラブこそが本当の社会人のクラブチームだ。実業団は社会人チームとはいえ半分、会社命令でやっているがそれとは違って、みんなサッカーが好きで、それこそ身銭を切ってやっていたのだから。そのころ夢として語っていたのは、この御殿下クラブを母体にして、総合スポーツクラブにしたいということだった。イギリスによくあるような家族をつれてあつまるカントリー・クラブをつくれば、子供や妻をまじえてのサッカーを楽しめる。現在、LBのシニアチームがこの夢を追っているのではないか。

部誌『闘魂』創刊号の表紙

わたしはもうグラウンドでサッカーすることはないが10年ほど前までは、水戸高の仲間とプレーしていた。家族ぐるみでサッカーを楽しむのはいい。

―― 部誌「闘魂」創刊号を出したのも、このころですね。

部員は多かったが、仲良しだった。昭和39年3月に卒業する安達（二郎）たちが部誌を出したいというので、題字を書くことを引き受けた。就職難の時代には雑誌をつくる余裕もなかったが、高度成長で余裕ができたのかもしれない。闘魂という言葉は、東大サッカー部に持ち続けて欲しいと考えて選んだ。安達が持ってきたいくつかの案の中には球音とか闘魂とかあって、そのなかから闘魂を選んだ。志とか精神を大事にする旧制高校サッカーが背景にあるのではないかといわれるが、そういう意識はなかった。ただ東大サッカー部に水戸高出身者が多くて、精神力を大事にする水戸高サッカーは東大サッカーに大きな影響を与えていたということはいえると思う。闘魂はその伝統を象徴しているということかな。

私は水戸高のサッカー部OB会誌にこう書いたことがある。「中学では基礎をつかみ、高校では心身を鍛え、大学では勝負の機微を知る」。水戸高サッカー部の練習は半端ではなかった。例えば、

練習が終わるころに先輩がやってきて笛を吹いてターンの練習をはじめる。誰かが倒れるまで暗闇の中でつづけた。昔の旧制高校ではそんな練習をやって心身鍛錬をしていた。

――「山下」で部員が皿洗いのバイトをやらしてもらいました。車の掃除なんかもしましたね。

店がグラウンドから近いので、部員に練習のあとで来てもらっていた。梅村の年度などはOBになってから同期会を店でやっていたし、東大サッカー部のOB諸氏の会合をたびたび開いていた。80歳になる2001年に店は閉めた。

――いまの東大のサッカー部をどう思われますか？

昭和34年から7年間監督をやっているうちに、学生気質が変わったと感じた。楽しんでサッカーする気風になってきた。サッカーを楽しむのはよいのだが、勝とうという気持ちは強くもっていて欲しい。

勝つためには練習することだ。技術のある天才的な人がいればいいけれど、東大はそうはいかない。普通の技術力の者は、基礎練習の積み重ねこそが大切だ。平凡な基礎練習を続けることは大変だが効果は大きい。私が現役のころ強かったのも、チームメンバー全員が平凡な練習を、情熱をもって行い、試合にのぞんだからだ。

現役の東大チームが東京都リーグの2部から1部へ、そしてさらに関東へ復帰してくれることが私の願いですよ。

須賀敏孝（すが・としたか）年譜

1922（大正11）年　1月30日上野桜木町生まれ
1928（昭和３）年　4月慶応幼稚舎入学
1934（昭和９）年　4月府立五中入学　翌年サッカー部入部
1939（昭和14）年　4月水戸高等学校入学　サッカー部入部
1942（昭和17）年　4月東京帝大農学部林学科入学　サッカー部入部
1944（昭和19）年　9月繰り上げ卒業、農林省林野庁に就職。海軍土浦航空隊に予備学生として入隊
1945（昭和20）年　終戦後、農林省に復職
1953（昭和28）年　農林省退職、上野池之端で天麩羅料理「山下」を経営
1956（昭和31）年　結婚
1959（昭和34）年　東大サッカー部監督就任、1965年（昭和40年）まで7年間務め、高田宗昌氏に引き継ぐ
1963（昭和38）年　御殿下クラブ創設、会長に就任
1967（昭和42）年　東大サッカー部監督復帰、1年間務めて浅見俊雄氏へ引き継ぐ
2001（平成13）年　天麩羅料理「山下」廃業
2006（平成18）年　1月有限責任中間法人東大ＬＢ会設立、初代理事長を務める
2007（平成19）年　3月有限責任中間法人東大ＬＢ会相談役

自分で自分を強くする

岡野俊一郎さん 2007 年６月撮影

岡野俊一郎さんは、東大サッカー部ＯＢのなかで、もっとも華麗なスポーツ人生を歩んだ人である。

大学在学中に第１回全国大学選手権優勝の立役者となり、日本代表選手に選ばれた。卒業後、日本代表チームのコーチとして、長沼健監督と組んで、1964 年東京大会のベスト８、1968 年メキシコ大会の銅メダルへと導いた。また 1960 年代に来日したドイツのデットマール・クラーマーに付き添い、コーチ兼通訳として日本のサッカー改革に貢献した。日本オリンピック委員会（ＪＯＣ）専務理事を務めてサッカーだけでなく日本のスポーツ全体のために働き、国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）委員として世界のスポーツのために尽力している。その後の日本サッカー協会会長やＪリーグのチェアマンが有給になったのとは違って、いずれも家業の傍らのボランティアとしての貢献である。

ここに掲載したのは、４回にわたってインタビューして話していただいたものの一部である。

2007 年６月 20 日、28 日。７月 20 日、24 日
東京上野、岡埜栄泉ビル内　岡野事務所で
（きき手）手島直幸、近藤詩月

五中でサッカーを始める

―― 夏目漱石の「三四郎」に出てくる上野駅前の和菓子の老舗「岡埜栄泉」が本業ですね。

日本サッカー協会で、コーチ、監督、会長等を務めましたが、いずれもボランティアで、収入は今も上野駅前にある『岡埜栄泉』からです。創業が明治６年で、日本にフットボールが伝えられたといわれている年ですよ。私が５代目になります。姉２人と妹１人。男はぼくだけです。スポーツは幼いころから親しんでいて、３歳から水泳、４歳からスキーを履いていました。そのころから上野近辺はもうアスファルトで、電柱を使って近所の連中とよく三角ベースの野球で遊んでいましたね。

小学校に入るとき、両親は私を慶応の幼稚舎へ通わせようと考えていたのですが、乗り物酔いをする体質だったので、やむをえず近所の黒門小学校（上野松坂屋近く）へ入学させました。幼稚舎に行っていれば、大学まで慶応に行ったでしょうね。

中学入学時には親戚の勧めもあり、都立第五中学校に入学しました。現在の小石川高校です。そこでサッカーに出会いました。

あのころに乗り物酔いしなければ五中に入らず、サッカーにも出会えず、東大に入学していなかったかもしれません。

五中は初代校長の伊藤長七先生がイギリスのパブリックスクールを理想にして創立した学校でした。ですから、背広を制服にした最初の中学で、

校技はサッカー。クラスに１個ずつボールがありました。戦争中でも上級生が下級生を殴るようなことはなかった。英語の授業もずっとやっていましたね。先生は生徒を「君」、我々は先生を「さん」づけで呼んでいました。校訓は「立志・開拓・創作」、学校ノートには「よく遊び、よく眠れ。暇があったら勉強しろ」と書いてあり、「男らしく、無邪気に、品をよく」という言葉もありました。もう１度人生やり直せた場合でも、また絶対五中に行きたいと思うくらい、大好きな学校でしたね。

小学校２年生

小学校３年生

── 本格的にサッカーを始めたのは？

中学に入学したのは、戦争中の昭和 19 年（1944 年）です。グラウンドは５年生たち（現在の高校２年生相当の年齢）が占領してボールを蹴っていました。僕ら１年生はテニスの硬球で校舎の間のブロック壁の空気穴をゴールにして“ちび蹴”というものに興じていました。

戦後になってサッカー部が復活し中学２年の終わりに入部、年間に２個配給されるボールを何度も修理して大事に使っていました。新しいボールが来ると誰が最初に蹴るのかが問題で、大変な競争でしたね。普段は週３回１～２時間くらいの練習で、ボールなしの練習もあり、よく走らされました。夏には毎年東大御殿下グラウンドを借りて１週間の通い合宿をやりました。

終戦直後には、やることがない先輩方が部員より多いくらい集まり、シゴかれましたよ。ゴールの中に入れられて先輩のシュートをヘディングでクリアーしてね。今と違って練習中は水を飲んではいけなかったので塩ふいていましたね。たまに来るアイスキャンディー屋がとても楽しみでした。

サッカーは人に指図をされないで“自分で考えたことを自分で判断してやる”といったところに魅力を感じていました。多少センスもあったので、３年生から本格的に始めて、秋にはすぐレギュラーになりましたから、なおさら面白かったですね。当時のフォーメーションは２バックで、ゴールキーパー以外のほとんどのポジションを経験しましたが、主にサイドハーフをやっていました。

戦後３年目の昭和 22 年（1947 年）に復活した、大阪毎日新聞主催の全国中等学校（旧制）選手権に東京代表で出場しました。新聞予想を見たら「1 回戦が事実上の決勝戦、都立第五中学対広島高等師範付属中学」なんて書かれたものだから「これは頑張らにゃーならない」と思った。前半は０−０だったけど、後半に５点もとられて０−５。今でもあのときの相手のフォワードはよく覚えています。木村、長沼、樽谷、太田、片桐。彼らに５点入れられましたね。これが長沼健さんとの初対面になります。彼とはその後、全日本学生選抜の初めてのヨーロッパ遠征や日本代表チームで、いっしょになり、２度のオリンピックを監督とコーチとして共に戦い、60 年の付き合いでした。（2008 年６月２日に逝去され、残念でなりません）

大学で全国大会に優勝

―― 東大には現役で合格していますね。

五中は、生徒の多くが当然のように東大へ進学していた時代でしたので、試験の前日までボールを蹴っていました。駒場での合格発表を見に行った帰りに本郷の御殿下グラウンドのそばを通ったらサッカー部が練習をしていたので、「入部させて下さい」と言って、まだ入学式の前でしたけれど入部させてもらいました。医学部進学コースの理科Ⅱ類に入ったのですが、これは生意気にも、人間が作ったもの、つまり法律や経済を勉強するのはばからしいと思っていて、人間そのものを勉強しようと思っていたからです。ただ、カエルの解剖の授業で卒倒しそうになっちゃいまして、これは人間そのものなんて絶対に無理だと、文学部の哲学科へ進学し、さらに心理学科へ転科しました。心理学科は教授にサッカーの好きな方が多かったので、とてもかわいがってもらいました。

東大でもすぐにレギュラーになって、1年生の時は東大5得点のうち4得点を決めて、関東選抜にも選ばれました。ポジションはセンターフォワードで、ドリブルシュートはへたでしたけれど、ダイレクトでボレーを蹴って入れるという練習は好きで、よくしていました。

1年生の時は当時の日本代表選手だった大埜（正雄）さんがキャプテンで、ある新聞が「東大に新しいエースが誕生！」なんて書いてくれました。大埜さんが卒業した2年生以降は「ワンマンチーム」なんて書かれましたね。グラウンドでは先輩後輩の関係なく言い合いをしていて、先輩をあだなで呼んでいました。

当時はWMフォーメーションでスリーバックです。新しい戦術はノコ（竹腰重丸）さんが教えてくれました。ふだんの練習は週3日で、夏は山中湖で合宿でした。その後恒例になる山中湖1周マラソンが1950年（昭和25年）ごろから始まりました。短距離は速くて好きだったけれど、長距離は先頭から5、6番目くらいでしたね。コーチはいても名前だけで練習には来ないのが当たり前でした。先輩方からは「東大は自分で自分を強くするところだ」と言われていましたので、自分たちでいろいろ工夫して練習をしていました。

―― 全国大学選手権優勝の思い出を。

1952年度（昭和27年度）の関東大学リーグで、東大史上はじめて1部最下位になりました。入れ替え戦は青山学院大に4－0と完勝したのですが、キャプテンの海老原（朗）が「新しい大会が出来たから、がんばって汚名を返上しよう」と言って、正月の第1回全国大学選手権に臨みました。ふつうは、秋のシーズンが終わると3年生（旧制）は部をやめるのですが、このときは3年生も全員が残って出場しました。

1回戦京都学芸大に5－0で勝利。2回戦で東京医大を9－0で破り、準々決勝の相手は中大。前半私のシュートで先制したものの前半に追いつかれ、後半なかばには3－1とリードされましたが、私のセンターリングを1年の西本が続けて決めて同点に追い付き、延長で柴沼兄が彼の大学時

昭和24年、大泉のグラウンドで

昭和27年　山中湖の合宿

昭和 28 年

代を通して２得点目となる４点目を決めて、４−３で逆転勝ちしました。準決勝は柴沼兄からのパスを浮かし相手キーパーが出たところを決めて１−０で立教に勝利し、決勝を早稲田と戦うことになりました。決勝戦ではまず柴沼兄からのパスを右足ダイレクトで決めて先制、後半相手キャプテン伯井にヘッドで追いつかれ１−１、その後また柴沼弟からのパスをダイレクトで流し込み、ポストに当たりゴール、２−１で優勝を決めました。

当時は柴沼兄からのライナー性のボールをよく決めていましたね。後ろからのパスを反射的にダイレクトに蹴って。あのころは華麗なシュートなんて言われていました（笑）。

海老原がすばらしいキャプテンで、彼を中心に非常にまとまっていて、あのときのチームは“負ける気がしない”といった感じで、勢いそのままにトーナメントを勝ち抜いていきました。私はゲンかつぎに毎晩、日本酒を１合飲んで眠ってから試合をしていました。

優勝して本郷の料亭「松好」で祝宴をあげまして、上座に座らされたのだけれども、僕は生まれて初めて飲みきれなくてね。ちょうど床の間に生け花があったので飲み残しを全部そこにこぼして（笑）。ゴールキーパーの立石が「俺は優勝チームのＧＫだ！」なんて叫んでいました。帰り道、酔ってフラフラになりながら御殿下のグラウンドを通ったときに「ここで練習をしたんだー」と思ったら涙がでましてね、しばらくそこに座っていました。

私は大学には７年間、部には計６年間在籍し、他の部員諸兄にだいぶ迷惑をかけました。その間、西ドイツで開催された「国際学生スポーツ週間」（現ユニバーシアード）への参加や日本代表のビルマ・タイ遠征など大変貴重な経験をしましたが、やはりこの大学選手権での優勝が一番の思い出です。

クラーマーとメキシコの銅メダル

── 指導者としての仕事は最初はユースからですね。

卒業後、家業を継ぎながら東大や館林高校などを指導していました。当時、私はサッカー協会の指導第１部（代表チーム担当）の委員に選ばれていて、1959 年（昭和 34 年）の暮れに、第３回アジアユース選手権の監督の要請を受けて、翌年に１年かけて選手の選考をして、1961 年（昭和 36 年）、29 歳の時に第３回アジアユース選手権（タイ開催）に監督として参加しました。これが代表での初めての指導経験となります。

そのころのユースは全員高校生で、そのなかから横山（謙三）、杉山（隆一）、小城（得達）、桑原（楽之）が、のちに日本代表になりました。釜本（邦茂）も１年生の時から選んだのだけれども、高校側から「キャプテンを差し置いて、１年生を出せない」と辞退の申し出がきました。僕は「将来日本代表になれる素質のある選手を選んでいるので、学年の順は関係ない」と反論したのですが、最終的にはご両親から辞退の申し出が来ました。

選手の選考について、ほかにも学校の先生方との考え方の違いがあり、またサッカーの盛んでない地域からも政治的配慮でとるようにいわれたので、私の選べるのは 14 人だけでした。

海外遠征なので選手全員の両親と面接して許可をもらったり、選手の特徴を書いたノートを作ったり、選手にはそれぞれに合った練習メニューを書いた手紙を送ったりと、いろいろ工夫しました。そのかいあってか、チームは当時全日本チャンピオンだった古河電工に勝つくらいまでになり、協会の役員に「いいチームを作ったね」と言われましたね。あのときの選手たちは、その後さまざま

な道に進んでいますが、その中の一人が現サッカー協会長の犬飼基昭君です。

―― クラーマーさんとの出会いは？

クラーマーが来日したのは1960年(昭和35年)の秋でした。4年後の東京オリンピックに備えて、日本代表チーム強化のため招いたのです。西ドイツのコーチでしたが、まだ35歳でしたので「わざわざ外国から呼ばなくても。そんな若者で大丈夫なのか？」などと、サッカー協会の内部では大激論だったそうです。

最終的には日本サッカー協会会長で東大サッカー部OBの野津さんが「参加チームは厳しい予選を勝ち抜いて出る。予選なしで出る権利を持つ日本は彼らと同等の力を持つ義務がある」ということで決断され、来日が決まりました。初来日のとき、私はちょうどユース代表の選考中でしたが「勉強になるから」とアシスタントコーチ兼通訳で40日間、帯同を命じられました。彼を羽田に迎えに行ったとき「ずいぶん背の低い方だな。ただ、鋭い目をしているな」という印象を受けましたね。

そのとき、代表チームは本郷の修学旅行用の旅館で合宿をしていました。クラーマーには御茶の水にある『山の上ホテル』を予約しておいたのですが「寝食をともにしないで選手の気持ちがわかるか」と、翌日から旅館に移って選手と同じ生活をしました。御殿下の土のグラウンドで代表チームを指導しました。代表の合宿がないときは、一緒に全国各地を回って指導をしました。

40日間の滞在後、いったんドイツに帰ったクラーマーの招きで、私は翌年の２月から３月にかけて、西ドイツへコーチ留学しました。

1961年4月にクラーマーは再来日して、13カ月間滞在。再来日の前に英語なら選手に通じるので、英語を話せるようにしてきて欲しいとお願いしていたら、次の来日ではかなり上達していましたね。来日中には地方の指導者を集めての講習会もずいぶんやりました。

私は、クラーマーの功績は日本に“コーチ学”

クラーマーさんと並んでインタビューを受ける

をもたらしたことだと思っています。日本にはそれまでも“コーチ術”はありましたが、各自の経験による指導法で、共通の基盤がありませんでした。基本理論を伝え、実践して見せたクラーマーの“コーチ学”はプレーの正確性をたかめ、日本全体のレベルの底上げをしてくれました。代表選手たちも彼に心酔し「クラーマーさんのために闘う」という気持ちになりました。

―― 長沼さんと組んでオリンピックを戦いましたね。

東京オリンピックの前の年（1963年＝昭和38年）に急に「お前、コーチやれ！」と協会から言われて、「監督は誰ですか？」と聞いたら「長沼だ」と言うので「やります」と即答しました。長沼健さんとは中学の大会で対戦してからの長い付き合いで、よく知っていましたから。長沼監督、岡野コーチのコンビで、東京オリンピックを戦い、メキシコ・オリンピックで銅メダルをとることになりました。

東京オリンピックでは試合のフィルム提出をＦＩＦＡに義務付けられていましたので、ＮＨＫの協力を得て私が編集しました。1−６で負けた５、６位決定戦でのユーゴスラビア戦では、相手のフォワードだったイビチャ・オシム（旧ユーゴスラビア代表）の映像をずいぶん使いましたね。当時圧倒的なレベルの選手でした。まさかその後に日本代表の監督をやるとは思いませんでしたね。

長沼監督とコーチの私の役割分担ははっきりしていました。監督は全選手を掌握し、コーチは作戦と個々の選手の育成でした。例えば５分間の

ハーフタイムでは２分で選手はリフレッシュし、残りの３分間で私が選手に作戦を伝え、監督が最後に一言「わかったな！」とだけ言い、皆で手をつないで「後半、がんばろう！」と言って後半戦にのぞみました。健さんが一言だけだったのは、岡野の指示は自分の指示だということを示すためでした。

――メキシコ五輪予選は厳しい戦いでした。

メキシコ・オリンピックのアジア予選ではかつてアジア大会（1958 年）で負けたフィリピンに 15−0 で大勝、その後台湾に４−０、レバノンに３−１で勝ち、全勝同士で韓国と戦いました。２−０での前半終了直前、松本（育夫）が右から折り返して八重樫（茂生）が飛び込んで、ガラ空きのゴールで得点のチャンスだったのですが、グラウンドの状態が悪く、ボールがイレギュラーして、スネにあたり、３点目を追加できませんでした。後半は、韓国は、雨でぬかったグラウンドコンディションを考えてロングパスを使うだろうと予測し、スイーパーをおいて守備することも考えたのですが、気持ちが守りに入る危険を避け、前半と同じ作戦で戦うことにしました。後半やはり韓国が作戦を変えてきてロングボールを多用。同点にされましたが、釜本が１点を加えて３−２。さらに韓国が３−３と追いつく激しい試合になりました。あと数分で終了というときに韓国にフリーでシュートされたときは、思わず目をつぶりましたが、ボールはバーに当たって、３−３で引き分けました。

最終試合は韓国が 10 月９日にフィリピンと、日本が 10 日に南ベトナムとの対戦でした。10 月９日の朝刊に「我々はフィリピンに 18 点入れて得失点差で日本を抜いてメキシコに行く」という韓国のコーチのチャン・ケイカンの談話が載りました。フィリピンは、日本が 15 点も入れた相手ですし、全敗で最下位は決まっていましたから、戦意を失っている可能性がある。「韓国が 18 点とるかな」と思い、９日の試合は見に行かず、合宿していた日本青年館にいて本を読んでいました。そうしたら会場にいた新聞記者から電話がかかってきて「岡野さん、前半終わりました。何点入っていると思いますか？　実はまだ２点しか入っていません。これではどんなにがんばったって 18 点は入りませんよ」と言われたので、すぐに見に駆けつけました。それで貴重な試合を目の当たりにしたわけです。フィリピンは 90 分間攻めを捨て、守ることに徹していました。韓国がシュートレンジに入ったら、タックル、タックル、タックル。たまにボールをキープして大きく蹴っても誰も追わないで、ゴール前に 11 人で待っている。90 分間これをやりぬいて、結局５−０で試合終了となりました。

試合終了後、僕はフィリピンの更衣室へすっ飛んで行って、コーチのパチェコになぜあのような試合をやったのかと聞きましたら、パチェコが「お前、チャン・ケイカンの記事を読んだか？　僕らは弱いのはわかっている、最下位なのも知っている。だけど我々はナショナルチームだ。相手から大量得点を予告されて、そのまま許すわけにはいかないと思った。この思いを選手に話したら、選手も 18 点入れさせないためなら、どんなことでもやると言ったので、あの作戦をとったんだ」と言いました。

チャン・ケイカンがあのようなことを言わなければ、このような結果にはならなかったかもしれませんね。この試合で我々は韓国と 10 点の得失点差が出来たので、最終戦に勝てばメキシコに行けることになりました。その南ベトナム戦は、肩を脱臼して痛み止めの注射をして出場した杉山が決勝点を入れて、オリンピック出場が決定しました。メキシコ行きが決定し選手たちがベンチの我々のところにとんで来たので、「ちょっと待てよ。今日も大勢の人が見に来てくれている。仲間で喜び合う前にお礼を言おう」と、日の丸を皆で広げてグラウンドを１周するように言いました。選手達がバックスタンドの前に行ったとき、客席から子供や若者たちが飛び降りて来て歓喜の輪に入り、メーンスタンドに戻ってきたときには 200 人近くの人が一緒になって僕と健さんを胴上げし

てくれました。

そして１年後にメキシコで銅メダルを取って日本へ帰って来ました。メキシコから帰る直前、選手全員にどんなことでもいいから大会の感想を書くように頼みました。18 人全員が気持ち良く書いてくれました。それを帰りのチャーター機の中で読み始めたら、「我々の試合も衛星中継で日本国中に放送される。国立競技場で１年前日の丸を持っていっしょに走った子供たちは必ず見てくれているに違いない。あの子供たちをがっかりさせるような試合にだけはどんなことがあってもしたくない」ということを 18 人全員が感想文のどこかに書いていました。本当にびっくりしましたね。あのチームの強さは“あの子供たちのためには”という共通の意識を全員が持っていたことでしょう。僕はチームから勝つためには何が必要かということを教わったと今でも思っています。それはチームの中に“ひとつの心”が生まれること、心を持ったチームはすばらしい仕事をするということです。

メキシコでの経験があまりにも強烈で、それへのこだわりが強すぎてしまったことが、70 年代のサッカーの低迷を招いたのではないかと思っています。人間は成功すると、ついその体験にこだわってしまうものです。もちろん、成功したことはとても大事だけれども、それを忘れることも大事だということですね。

オリンピックの役員として

―― テレビの解説者としても、ずいぶん活躍しましたね。

東京 12 チャンネル（現在のテレビ東京）の「三菱ダイヤモンドサッカー」については、今でも「見ていましたよ」とか「これでサッカーが好きになりました」などと声をかけられるのですが、実は僕の解説者としての原点はＮＨＫなんです。1960 年（昭和 35 年）から 30 年間やっていました。解説をするにあたってどのように勉強したらいいかとＮＨＫの担当者に相談したら、当時の相撲解説者の神風さんと玉の海さんを例にとって「岡野さんは神風さんタイプだから神風さんの解説を勉強したら」と言われました。ＮＨＫの出演者パーティの席で野球の名解説者だった小西徳郎さんにお会いして「あなたの解説、いいですよ。いまのまんまでおやりなさい」と言われたのは非常な励みと自信になりましたね。

1968 年４月に始まったのが三菱ダイヤモンドサッカーでした。ダイヤモンドサッカーが出来たのは、当時東京 12 チャンネルの番組審議委員だった大先輩の篠島秀雄三菱化成社長が英国に行ったときに、ＢＢＣの番組「マッチ・オブ・ザ・デイ」をご覧になって、これを日本でもやりたいと思ったのが始まりです。それでＮＨＫで解説していた後輩の僕に「解説をやれ」と指名されたのです。当時、海外のサッカーは全く報道されていないときでしたから、新鮮な海外の話題を取り上げたことで、サッカーというのはこんなに楽しいものなんだということを日本中に伝えたいと思いました。決まった時間にチャンネルつけると必ずサッカーをやっていると、いろいろな競技団体からも非常にうらやましがられましたし、1970 年メキシコ・ワールドカップの全試合を１年間かけてオンエアしたことも、日本のサッカー界にとって非常に意味があったと思います。今のような情報化社会ではないなかで１週間に１回、45 分でも世界の一流のサッカーを放送したあの 20 年間は、僕にとっても日本のサッカーにとっても刺激的なことでしたし、視聴率がせいぜい３％くらい、１％をきることもあった番組にずっとスポンサーになってくれた三菱グループには心から感謝しています。

―― その後、オリンピックの役員として、サッカー以外の分野でも活躍されました。

ミュンヘン・オリンピック（1972 年）の予選で負けて代表監督を辞任した後、1975 年（昭和 50 年）に日本体育協会理事、1977 年（昭和 52 年）に日本オリンピック委員会（ＪＯＣ）総務主事になりました。体育協会の理事になったときには、一般紙に『昭和生まれの理事誕生』と書かれまし

たね。就任時の記者会見で言った言葉は「忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず（平重盛）」。43 歳で体協の理事に抜擢されたのは嬉しいけれども、サッカーとのバランスを考えて迷いましたね。このときは明治生まれが長く役職に就いていて、大正生まれがいなくて昭和一桁が抜擢されたわけです。ＩＯＣ（国際オリンピック委員会）委員も、まったくなる気はなかったのですが、前任者の清川正二氏と JOC の柴田勝治委員長に推されて引き受けました。

なぜ私がいろいろな役職や委員に推薦されたのかを考えてみると、ひとつは自営なので時間が自由に使えるだろうということ、二つ目は東大出身なので多少は語学も出来るだろうということ、三つ目はあまりスポーツの強くない東大出身でしがらみがないから中立性があってバランスのとれたものの見方をするだろうということ、それで重宝がられたのだろうと思いますね。

この前、東大の現役生に「岡野さんはどうやってスポーツ界のトップに昇りつめたのですか？」なんて訊かれて驚いたけれどもね（笑）。これまでいろいろな役職は上の方から、なんのかんのと引っ張りあげられたわけですよ。だいたい本人に相談なしでね（笑）。

今、なかなか次の人材が出てこないんですよ。というのも、我々が選手強化のために選手寿命を延ばす努力をした結果、現役生活が長くなったので、引退して役員になるのも遅くなり、代替わりが難しくなっているんですよね。各団体の委員も老齢化してきていますし、このままだとまた停滞するのではないかと心配しています。

プロ・アマの垣根を越えて

―― 日本のスポーツについて

日本はスポーツを文化ととらえず教育の範疇とする考えが根強く、アマチュアリズムを大切にしてきました。これがサッカーなどのプロ化を遅らせた一因だと思います。アマチュアリズムを大切にしていた国は日本だけではなく、例えば同じくアマチュアリズム重視だった英国では、プロ、アマの垣根のないサッカーを統括するＦＩＦＡに加盟していない時代があったほどでした。日本ではアマはプロに毒されるので同居してはいけないという考えだったので、世界でプロのないスポーツではなんとか戦うことが出来ましたが、プロのあるスポーツでは差がついてしまいました。1972 年（昭和 47 年）にＩＯＣ憲章から「アマチュア」という言葉が消えてアスリート (競技者) だけになり、1980 年代後半からオリンピックにプロ選手が出場できるようになりましたが、日本では、一般人の中にはまだまだアマチュアリズムを信奉する人も多いのではないかと思います。英国の陸上の名選手セバスチャン・コーが「ヴァイオリニストはいい演奏をして人を感動させて高いギャラを貰える。そのためには毎日練習に時間をかけるからプロでなくてはならない。アスリートも 5 万の観衆を集めて熱狂させる走りをするためには、それに対価がつくのはおかしいことではない」と言っています。この考えも正しいのではないでしょうか。

―― アマチュアリズムのために、日本ではサッカーのプロ化が遅れたと……。

Ｊリーグの設立は 1993 年（平成５年）ですが、実は私が大学を卒業する直前の 1956 年（昭和 29 年）に、日本にプロサッカーの構想がありました。それは読売の正力松太郎社主が世界中を回って、世界で一番盛んなスポーツはサッカーだということを実感されて、「野球でプロを作った読売はサッカーでもプロを作らなくてはいけない」と、読売新聞と後楽園で各１チームずつ作って、日本中を帯同して廻ろうと考えたのが始まりでした。当時、後楽園には東大の陸上部 OB の鹿野さんがいらして、「後楽園がプロサッカーチームを作るのでやらないか！」という誘いを受けました。その後なんの連絡もないので「おかしいなあ」と思っていましたら、当時のサッカー協会の理事長だった竹腰さんが正力社主に呼ばれてこの案を聞かされたとき「サッカーは普及していないので到底無理です」とお断りしたということです。それを聞いた

大正力が一言「職業野球（プロ野球）も長い間赤字でしたよ」といわれたと竹腰さんから直接聞きました。もし実現していれば、僕はプロサッカー選手の第１号になっていたかも知れなかったんですよね。実現せず残念でしたが、当時の日本は弱かったですし、サッカーでは観客が集まりませんでしたから、そこまでの決断は難しかったかも知れませんね。ところで大正力のこのお考えは遺言のように受け継がれて、読売サッカークラブ、今の東京ヴェルディが生まれたことは、あまり知られていないようですね。

── Ｊリーグについては？

Ｊリーグ設立時はＩＯＣ委員でしたのであまり貢献していません。あと１年遅れたらバブルがはじけて設立は難しかったと思います。サッカーは昔から世界中でプロ・アマの垣根なく、やっているものだということは、機会があるたびに言っていたので、プロ化は必然だと思っていました。プロのコーチであるクラーマーが日本チームを指導した東京オリンピックが、サッカーでのプロとアマの垣根を破ったきっかけになったと思っています。彼が日本を去るときにリーグの設立を提案したけれども、すぐにプロリーグとはいかず、選手からプロ化を進めていって、その第１号が木村和司になりますね。そういったことに尽力したのが森健児や木之本興三です。

川淵（三郎）がＪリーグの理事長をやることになって、挨拶に来たときに「“コミッショナー”と名乗る」と言っていたので「プロサッカーリーグという新しいことをやるのに、なんで今まで野球で使い古された言葉を使うの？　それではだめだよ」と言ったら、「では、何か考えて下さい」と言うので「チェアマンはどうだ？」と言いました。「チェアマンなんて聞いたことがない」と言うので、「100 回でも 1000 回でもチェアマンの川淵ですといっていれば『チェアマン　イコール　川淵』になるよ」と説得しました。

ついでに「オープン戦」も「プレシーズンマッチ」「ポストシーズンマッチ」に変えるように言いました。オープン戦というのは違う組織の者が入ってきてやるからオープンなのであって、日本のプロ野球でシーズン前やシーズンオフにやる試合をオープン戦と呼ぶのは誤りですね。それをまねしていては新しいイメージに合わないし、これからマスコミに出る言葉ですからね。後にW杯の関係で当時経団連会長だった豊田章一郎さんにお会いしたときに「岡野君、経団連の会長のことを英語ではチェアマンというのだけれどもチェアマンというと川淵君のことだと思われて困っちゃうんだよ」と言っておられましたね。

今でも残念だと思っているのが「フロント」に代わる言葉がどうしても見つからなかったことです。フロントも野球の言葉でイメージは親会社から派遣されて、数年だけチームにいて、また会社に戻るといった感じで、チームに骨を埋めるという意気込みが感じられないわけです。その習慣を変えて、Ｊリーグの運営に全力を費やすように名前そのものを変えたかったのだけれども、いい言葉が見つからなくて残念です。それでも最近では新潟（アルビレックス）や浦和（レッズ）のようなチームも生まれてきていますが、今でもフロントという言葉は変えたいと思っています。

── 最後に、現在の東大のサッカー選手たちに望むことを。

今の現役学生プレーヤーの方が我々よりずっとうまいと思います。どちらの足でも蹴ることも出来ますしね。ただ、どうしたら守れるか、どうしたら点が取れるか、つまり２手３手と先を読んでいない印象があります。体力も技術もあるのですから、もう少し考えてプレーしたらと、もったいない感じがします。

かつて僕らが諸先輩方から言われたように『東大は自分で自分を強くするのだ』と考え、グラウンドで何が出来るのか出来ないかを自分で考えて練習するべきではないでしょうか。

仲良しクラブなら勝たなくてもいいのですが、大学のクラブとしてＯＢや学校からお金が出ているのですから勝つことにこだわって欲しいですね。

ただ、ここ 10 年くらいを見ていると、東大に限らず代表選手でも技術は向上しているようなのに「止める、蹴る」といった基本的なプレーの正確性が欠けてきているように感じます。常に基本を大切にして欲しいと思っています。

岡野俊一郎（おかの・しゅんいちろう）年譜

1931（昭和６）年　8月28日東京上野で生まれる
1938（昭和13）年　黒門小学校入学
1944（昭和19）年　東京府立五中入学
1947（昭和22）年　全国中学校選手権出場
1949（昭和24）年　東京都立小石川高等学校を卒業、東京大学理科 II 類に入学
1953（昭和28）年　第１回全日本大学サッカー選手権大会で優勝
1957（昭和32）年　東京大学文学部心理学科卒業
1960（昭和35）年　クラマー来日、アシスタントコーチ兼通訳を務める
1961（昭和36）年　ドイツ留学、アジアユース選手権にユース日本代表監督として参加
1962（昭和37）年　クラマー再来日、アシスタントコーチ兼通訳を務める
1963（昭和38）年　日本代表コーチ就任（長沼健監督）
1964（昭和39）年　東京オリンピックで日本代表ベスト8
1968（昭和43）年　メキシコオリンピックで日本代表銅メダル
1970（昭和45）年　日本代表監督に就任（～ 1971年）
1974（昭和49）年　日本サッカー協会理事就任
1975（昭和50）年　日本体育協会理事就任
1976（昭和51）年　日本オリンピック委員会（JOC）総務主事就任
1987（昭和62）年　日本サッカー協会副会長就任
1990（平成２）年　国際オリンピック委員会（IOC）委員就任
1995（平成７）年　ワールドカップ組織委員会委員就任
1998（平成10）年　日本サッカー協会会長就任
2002（平成14）年　東アジアサッカー連盟初代会長就任、日本サッカー協会名誉会長就任
2003（平成15）年　日本サッカーミュージアム初代館長に就任
2005（平成17）年　日本サッカー殿堂第1回受賞者に選ばれる

私のサッカー人生 **長山 樹（たつき）さん** 寄稿

蹴球からサッカーへ　ボールと共に70年

70年もの間、付き合ってきた蹴球・サッカーは私の人生でかけがえのない部分を占めてはおりました。サッカーを見るのもプレイするのも好きですが、その割にいつもさめた眼でみており、没頭耽溺することはありませんでした。最近はレフェリーの判断に不満を感じることが多く、洗練された高い技能レベルのチームが展開する華麗なプレイに魅せられることもありますが、公正なジャッジが行われない試合を見ていると落胆再三で、なんとか改善の方法がないものか、これではサッカーの人気が下がらぬかと心配しております。

四十雀クラブ東京のユニフォーム姿の長山さんとお孫さん（2007年8月、山梨県鳴沢村ふれあい広場で）

少年時代

宮本能冬先生に教えられる

70年前、小学校時代から始めた時は、純真無垢、そんな邪念など持たず夢中でした。小学校３年生の時（1939＝昭和14年）板橋区（現在分離して練馬区）練馬尋常高等小学校貫井分教場から新設の東京府立・大泉師範附属小学校の３年に編入しました。

体操の時間は週４時間ありました。その内、２時間を学級担任の仲瀬敏久先生が受け持ちました。豊島師範時代から柔道を得意とする仲瀬先生の体操時間はほとんど柔道ばかりでした。残りの２時間は宮本能冬先生（1907-1994）が蹴球の特訓に使いました。

宮本能冬先生は青山師範の学生時代から有名な蹴球選手で、後に極東オリンピックの蹴球代表選手の一人に選ばれました。宮本先生は40名のクラスを１軍、２軍、３軍の３組に分け、蹴球の試合をさせてくれるので、体操の時間を待ち焦がれました。でも、仲瀬先生はいつも宮本先生が児童に蹴球をさせていることを好ましく思ってなく、時どき、生徒達の前で今日もまた蹴球をやったのかとつぶやいておられました。

大泉師範学校は昭和10年頃、日本の軍国化が進む中で新設された学校なので、武道を盛んにし、蹴球さえも敵性スポーツとみなす空気でした。宮本先生は1941（昭和16）年11月、先輩山田午郎氏からの誘いに応じ、朝日新聞本社に転職されました。お別れの会もなく去られ、蹴球に夢中な子供達はがっかりしました。

宮本能冬さんは戦後初代の日本蹴球協会専務理事を務められました。私はお亡くなりになる前年、母校学芸大学大泉分校附属小学校同窓会で懇談致しました。

戦前の小学校とサッカー

日本の敗戦・第２次世界大戦終結の1945（昭和20）年以前、東京の小学校で蹴球を児童にやら

せていたところは非常に少なかったようです。目黒区の油面小学校、板橋区（後に練馬区が分離）の上板橋第３小学校（現在の練馬区旭丘小学校）、それに我が母校大泉師範附属小学校など数えるほどでした。油面小学校はＬＢの二宮泰（2006 年４月 27 日逝去）先輩が卒業された小学校で、1925（大正 14）年５月 24 日創立され、今年 83 周年を迎えました。生前二宮さんと何度もお酒を飲みサッカー談義にふけったとき、油面小の話をよく聞いたものです。あの辺りは一帯が祐天寺の土地で江戸時代は一面の油菜畑だったそうです。

日本に初めて蹴球がもたらされたのは 1873（明治６）年、日本海軍の指導に来たイギリス海軍のダグラス少佐らの乗組員が築地の海軍兵学寮（兵学校）で生徒とフートボールに興じたときだそうです。そのあとフートボールの名が残ったが、球技は学校や社会に定着しなかったようです。

1878（明治 11）年 10 月、文部省が体育振興のため神田一ツ橋に開設した体操伝習所は 1886（明治 19）年４月、高等師範学校に新設された体操専修科になりました。このころ、戸外運動科目（競技科目）７種が課外で設けられ、その一つに「蹴鞠」（フートボール）があったようです。

中学校への普及

1896（明治 29）年３月、高等師範学校の組織に運動会が常設され、その中に選択制の正課７部、柔道部・撃剣及び銃槍部・弓技部・機械体操及び相撲部・ローンテニス部・フートボール部・ベースボール部が出来ました。

1902（明治 35）年４月、広島高等師範学校が創立され、東京の方は東京高等師範学校と呼ばれるようになりました。翌年 12 月、東京高師チームと横浜外人クラブとの間でフットボールの試合が行われました。試合の状況は新聞で大きく報道されました。その後３年間、継続的に親善試合が行われたので、全国の師範学校や中学校からフットボールの指導を依頼する申し込みが増えたそうです。その要請に応じて東京高師の部員は全国

1942 年（昭和 17 年）西宮球技場で行われた全日本中学学徒体育大会に出場した東京府立五中チーム。後列左から３人目が二宮泰さん

30 に及ぶ各校を指導しました。

高等師範の卒業生が全国の中学校、師範学校に赴任して、フットボールの普及は急速に進みました。やがてフットボールを体験した師範学校の卒業生が多くの小学校へ就職し、蹴球の好きな先生たちは蹴球を児童に教えたと思われます。

しかし、小学校では児童が蹴球になじめる条件が整わず、野球の方が盛んになっていったのではないでしょうか。一方、高等師範出の中学教員が全国に散らばり中学校で蹴球が盛んになったので、全国大会が毎年開かれるようになりました。（本項は ex 東京文理大・東京高師監督、ex 都立大泉高校教諭、ex 都立大学教授で私が尊敬した多和健雄先生のお話しを参考にしました）

大正時代（1912 ～ 26 年）、旧制高校の蹴球熱が高まり、インターハイの存在が大きくなったとき、日本の蹴球活動は大学・高校・高専の学生が動かすようになりました。諸外国ではサッカーが軍の学校では一つの競技科目であり、軍隊では日常の運動競技になっていたと思いますが、日本では見られず、一般の学校でサッカーが広まって行ったのです。この違いが日本のサッカーの歴史と現況に関係しているかも知れません。

いずれにしても太平洋戦争開始の 1941（昭和 16）年 12 月までは、スポーツをはじめ各種の欧米系文化への拘束がさほどひどくなかったので、たいていの学園では平穏無事な環境のまま推移いたしました。

中学時代

五中に進学、敗戦後にサッカー部復活

1943（昭和 18) 年、私は宮本能冬先生の蹴球の教え子が多く在学している東京府立五中（小石川高校）へ進みました。蹴球歴４年の私は校内大会で抜きん出た動きをしました。キャプテン達は私を放課後教室や通学路で、蹴球部への入部を熱心に勧誘しました。五中の校風には英国イートンスクールの流れを汲むリベラルな思想が定着しておりまして、上級生は紳士で優しく非暴力的でした。

蹴球は五中の伝統ある校技で、期末試験の全科目平均点が 85 点を割ると担任の先生から退部を勧告される慣例になっていることを聞き、加えて一級上の小学校の先輩に「蹴球部に入ると高校受験に受からぬからやめろ」と言われたので、私は入部を遠慮しました。同学年で違うクラスの折原一雄さんは入部しました。85 点以上採ったのか退部せず、上級生が勤労動員に行き、学校が閑散となった翌年７月末まで少人数でボールを蹴っていたようです。

２年生の冬、北区滝野川の内閣印刷局へ勤労動員されました。敗戦の翌日、8 月 16 日「インフレで紙幣が足りなくなり、モラトリアムを起すと一大事だから、しばらく働け」と、当時、府立石神井中学から転任して来られた沢登哲一校長の訓辞を受け、とうとう 10 月末まで２ヵ月半、学園生活に戻れませんでした。

11 月、中学３、４年生有志が集結、復活蹴球部の練習が始まりました。大泉師範附属小教諭の宮本能冬先生の教え子４名が中核となりました。伝統ある駕籠町の校舎は、４月 13 日の米空軍長距離爆撃機Ｂ 29 による非戦闘地域無差別爆撃で焼失させられてしまいました。五中生のうち、勤労動員されずに学業を続けていた中学１、２年の下級生と８月 15 日敗戦と同時に動員解除になった４年の上級生は滝野川の造兵廠附属職員訓練所跡で学び始めていました。運動場は畑のあとで凹凸が激しく、ゴールポストは古材利用の物でボールは２、３個しかなく、すべてがいびつなボールでした。

東京府立五中のサッカー部。前列右端が長山樹。その左が岡野俊一郎、中列左端が折原一雄（いずれも東大ＬＢメンバー）。中列右から２人目が本田哲郎先生、３人目三和一雄先生

中学選手権の東京代表に

1946（昭和 21) 年３月から初の中学選手権大会が始まり、４月６日、東京高師附属中と東大御殿下において決勝を戦い、１対２で惜敗しました。

秋の国民体育大会も勝ち残り両者再び御殿下グラウンドで対決、五中は０対１で連敗しました。続いて東京都中学蹴球リーグ戦の第１部５校（高師附属中は上級学校受験準備のため学校の方針で参加を辞退しました) では最終戦を敵陣九中（北園高校）に赴き２対１で勝ち、リーグ優勝をしました。

1947（昭和 22) 年９月 24 日、第２回東京蹴球選手権大会中等の部決勝戦が東大御殿下グランドで行われ、３度目の対決は０対０の引き分け、雌雄決戦は４日後の再試合に持ち越されました。第１試合の模様について東京蹴球協会理事長の松丸貞一さん（五中・慶応・ex 千代田生命・故人）が第一新聞紙上で論評してくださいました。“稀に見る激闘で両チームとも真剣かつ純真、その気迫に満ちた姿とフェアーな試合態度は応援の両校生徒や卒業生を感動させた”。

９月 28 日、さらに増した大応援団は御殿下の土手を埋め尽くしました。五中チームに故障から復活した名インナー先崎昭雄選手が加わり、３対

２で辛勝し西宮の全国大会に臨みました。

12 月 22 日、全国中等学校優勝サッカー大会が始まりました。このとき「サッカー」の名称が公式戦の印刷物に登場しました。「蹴球」から「サッカー」の時代に入ったのでした。（1978-82 年、私がＮＺ兼松江商社長をしていたとき、英連邦諸国では、私が「サッカー」と言うと、現地の人は必ず「フットボールだね」と念を押して来たものです。東大が“ア式蹴球部”、慶応が“三田ソッカー倶楽部”とそれぞれ個性ある名称を使っているのは味わいがあります）

東京代表・第一シード校の東京都立五中と中国地方第一地区代表の広島高師附属中との第一試合は前半風上に陣取った五中が五分のボールキープをして、相手方ゴールに迫ったのですが、名手岡野俊一郎選手が敵のきついマークにあいシュートチャンスを潰されて、０対０のまま。後半、旅の疲れと広高師附中の馬力に圧倒され、長沼健・木村規選手らの連携によりたちまち５点を失い完敗しました。

もっとも相手の反則は超中等級で、荒っぽいチームに出遭ったことのない真面目でひ弱な東京チームは転んだところ、頭を蹴られたり、パンツを掴まれたりしたので、嫌気が差してしまいました。遠征前、全校あげての壮行会で激励され、多額の寄付を貰い、東京駅で歓呼の声に送られ関西遠征の途についたのに、いちころの敗北では皆にあわせる顔がなく、翌年の正月明け学校に行って皆からご苦労さんと労われたときは穴に入りたい気持でした。

大学時代

教育大に入りレギュラーに

1949（昭和 24）年、新制大学発足に際し、行政当局は整備すべき諸問題の解決を遅らせ、入学試験が６月になってしまいました。今では想像も出来ない政府の失策だと思います。

サッカーに明け暮れていた私にとって、受験時期が遅れたことは追い風であったはずが、のんびり癖が出てアルバイトや畑仕事に気を取られておりました。試験勉強のキャッチアップが出来ないままに入試に臨みました。医者になるつもりで東大理科２類を受け落ちました。東京教育大学理学部は受かりました。

２年後に国立の医学部を受験するので、まだ先だからとサッカー部に入っても大丈夫と思い、文理大や高師の先輩部員が開いてくれた歓迎会に参加して入ってしまいました。

いきなりレギュラーにさせられ、ライトハーフのポジションに就きました。同期に永嶋正俊（真岡中出、後にサッカー協会役員）、一柳和正、上矢久雄（甲府中、昭和 22 年西宮全国大会出場、不動産業）さんなどがいました。当時、大物新人大量入部と期待されたようです。

戦中インドネシアから日本の陸軍士官学校に官費留学、戦後高等師範学校に編入したスジョノ・メルトディプトロ（Sudjono Mertodiputro）さんの存在が特記されます。ドリブルと浮き球の処理に卓越し、５人抜きもやりました。対・立教戦のとき相手の応援席から、やすやすと振り廻され悔しかったのでしょう、人種差別の罵声が飛んできました。さすがに、おとなしいスジョノさんも、ドリブルを止め相手をにらみつけておりました。試合後に私はスジョノさんの名誉を回復するため、相手のキャプテンに抗議をして欲しいと新人の立場を忘れ、自チームのキャプテンに詰め寄りました。キャプテンは言下に「詰まらんことを気にするな」と一蹴してきました。私にとってこれは大きな期待はずれでした。

1972（昭和 47）年、東京文理科大学（のちの教育大）蹴球部時代の仲間の一人、川崎直さんが取引先の川崎重工の仕事でジャカルタへ出張したとき、同社の代理店をしていた兼松江商の猪股尚徳所長に頼んで人口 500 万人の中から探し出し、それまで不明だったスジョノさんがカルテックス・インドネシア会社の人事部長の要職にあることが分かり、20 年振りの再会を果たしたそうです。

東大文科に入り直す

将来設計のため、ある日私は勇気を奮って父親に国立の医学部受験の許可を求めました。父は「医者はいい商売ではないぞ」と私の悲願を言下にはねつけました。四国・宇和島藩の勘定役を曽祖父に持つ父は、宇和島が輩出した穂積陳重博士などにあやかり法学家にさせたかったようです。７年間も学費を掛けることは効率が悪いという考えもあったのでしょう。

金の出所がないのですから仕方がありません。私はすぐさま頭を切り替えました。翌年、東大文科１類を受けるのだと決め、サッカーの練習を続け六大学（早大・立大・慶大・東大・教大・明大）の試合には出ることにしました。しかし、もしかしたら仲間になるかもしれない東大とは戦えないと考え、対東大戦には体調不良を理由に欠場致しました。12 月末、埼玉大学教育学部学生寮で５日の冬休み合宿に完全参加し、黙って教育大サッカー部を去りました。この間きちんとした挨拶をしなかったことを今でも反省しております。

明けて 1950（昭和 25) 年１月末、東京教育大学学生課に退学届を提出致しました。国立大学は退学しないと他の国立大学を受験できないと言われておりました。落ちたら授業料が高い私学に入ることは家計が許しませんでしたから退学再受験は背水の陣でした。

東大文１（法経コース）の試験場になった農学部の教室を早々と２番目に退席しました。受験対策で予め付けた狙いが当り、すらすらと回答出来ました。

入学試験の発表は駒場の正門前広場でした。その日はたまたま神宮競技場でサッカー東西対抗戦があり、私は多分受かっていると思い発表を見ずに神宮競技場に行きました。試合が始まる直前、私を見つけた原忠彦さん（ex 第一生命専務取締役、故人）がスタンドの上部座席から「長山さんの名前が出ていましたよ」と言いました。高師附属高を卒業して１年間浪人していた彼も合格しました。中学時代の好敵手であり、自宅が西武池袋線石神井公園駅と富士見台駅の近隣関係なので、よく顔を合わせていた相手でした。原さんが先に見てきてくれ、私は落ち着いて試合を観戦し、行かなくてもいいのに私は駒場まで行きました。やはり名前があったので納得しました。

東大チームに五中出身が５人

駒場の教養学部では旧制一高時代からの部員と新制大学第１回生（昭和 24 年入学）から加わった学生がア式蹴球部を編成して練習と対外試合をしておりました。

入学早々、学習院大学との練習試合が目白の学習院グラウンドでありました。前年、大泉高校３年を終え学習院大学に入った畏友・名プレーヤー奥山健さんも相手チームに入っておりました。

東大チームの中に旧制五中出身者が５人おりましたが、布施正明さん（ex 多摩老人医療センター副院長、故人）と岡野、長山２人の本ちゃん以外の内田八郎・物井勉さんらは五中時代、部員ではなくブロ蹴（校庭の一隅にあるブロック敷きのコートでやるミニサッカー）や校庭での遊戯サッカーの経験者でした。布施さんは２人居て痩身で「カルメン」のホセ・エスカミリオに似ていたので“ホセ”、もう一人の布施さん（ex 富士銀行、故人）は多少肥っていたので“ブセ”と呼び合っておりました。

キャプテンはイケメン小倉寛太郎さん（ＡＩＵから転職、日本航空労組委員長から伊藤社長秘書になって話題の種を撒いた人)。高師附高サッカー部からの原忠彦さんも加わり、学習院大学チームに３対２で勝ちました。

この他、極東貿易に就職した和田さんと日清製粉へ入った本間さんがいました。

１、２年生で京大戦へ

本郷で春からぼちぼち練習があり、行って見ると決った時間に出そろっていなく、めいめい勝手に好きな練習をしていました。１時間くらい経ってそろったところでハーフ・コンビネーションゲームを行うという調子でした。工学部の学生は

実習があり、なかなか時間が取れないと言っておりました。制約をしない緩やかな空気は、私がそれまで、たどってきたサッカー生活と同じようで、まことにアットホームな気分でした。

７月20日過ぎ、駒場で学ぶ新制大学教養学部生で構成するチームが京都大学に行きました。この年、なぜか旧制東大チームが参加しない対京大定期戦となりました。夏休みで空いている農学部学生寮に一泊しました。全員、東京駅を夜行列車で発ちました。一人のチームメイトと青臭い思想問題をいつまでも議論し、他の仲間はうるさくて寝つかれなかったはずでしたが、不思議と文句の一つも出ませんでした。

京都方面は前日台風が襲来して、各地で氾濫がありました。中学の友人・大学俊彦さんから母親の実家に居るから立寄れと手紙が来ていたので、電車で花園駅に行きましたら、その「西田」という旧家は床下浸水で大混乱、片付けを手伝い、昼過ぎに京大グラウンドへ行ったら仲間はとっくに試合前の練習を始めており、五中で一年先輩の名ゴールキーパー立石知也さんに“遅いぞ、どこに行っていたんだ”と怒鳴られました。このとき、同期の金井弘夫、川邊正行、中川勉、新倉雄三、原忠彦さんのうち、何人かは参加していたと思います。

試合後、近所の銭湯に行きましたら、番台の前が大きく開けて見とおしが良いのに動転したものの、東京と違い開放的な雰囲気に親しみを感じました。

夜、交歓会が三条河原際のビヤホールであり、京大チームと対面着席で会食しました。当時まだビールでもおよそアルコールの部類はほとんど飲んだことがなかった私は、岡野さんが活発に飲み談笑しているのを横目にしながら、向かい合った京大生と意気投合、すっかりいい気分になりました。

アルバイトのため退部

夏休に入り山中湖畔の寮で夏季合宿がありましたが、私はアルバイトがあるので参加できませんでした。秋のリーグ戦に備え、どこの大学チームも夏の合宿を総仕上げと位置付け、部員の練成に励みます。夏の合宿に参加しないで秋のリーグ戦に出してもらえないことは覚悟をしておりました。

夏休が終わり９月初めから御殿下での練習が始まりました。私はキャプテンの大埜正雄さんに合宿に行かなかったことを詫びました。彼は私が働かなくてはならない事情を知っていたので無理に出て来いと言わなかったとおっしゃいました。このとき、私は気配りのある優しい指導者だと思いました。

関東大学リーグ戦が始まり東大は後楽園グラウンドで立教大と戦いました。私はライトハーフで出場しました。新人の原忠彦さん（レフトハーフ）、岡野俊一郎さん（センターフォワード）も出ました。私達はがんばったのですが、結果は０対２でした。新人の私が試合に出るようになって出場できなくなる先輩がベンチを暖めているのが申しわけなく、次の試合が対教大でもあり、また先行きアルバイトが忙しくなって来る事情を熟慮し、後の試合を出ず事実上の退部を致しました。この頃、岡野俊一郎さんが五中、東大のクラスメート宮本英樹さんからの家庭教師の口を私に紹介してくれ、大いに助かり今でも感謝しております。

ＯＢとして

ＬＢ会に登録

1969（昭和44）年７月から1971（昭和46）年８月まで兼松江商（株）香港支店に勤務していたとき、中国人社員と彼等の友人達の中に入ってサッカーを楽しんでおりました。マカオにも遠征し歓迎を受け現地の新聞で報道されました。香港滞在中、小･中学校の一年先輩である星秀夫（慶応ソッカー部・故人）から熱心に勧誘され、帰国後直ぐ私は四十雀クラブ東京に入りました。同じころ、東大ア式蹴球部ＬＢ会に登録してもらいました。

それ以来、ＬＢの行事にはよく参加してきました。

一時期、全国サッカー名門中学大会が第一生命グラウンドで年中行事として行われておりました。神戸一中、湘南中学、東京高師附中、東京都立五中、都立八中・広島連合などのＯＢが集い、旧交を温める楽しい催しものでした。上級学校のサッカー生活を共にしたり、戦いあったりした大きな同窓会のようなものですから、試合後のサロン・フットボールがハイライトで、各校チームは歌や演説で賑やかに交歓しました。そのうち他の中学ＯＢが「名門だなんて冗談じゃない」という声がでて「うちも入れろ」とか「やめてしまえ」とか騒がしくなり、高齢化が進んだせいもあり途絶えました。一方、東早慶三大学対抗戦は後続の人材が豊富なので、楽しい交流が活発に続いております。

もう10年前になりましょう。三大学戦のサロン・フットボールがすんで京王線仙川駅際の飲み屋でＬＢメンバー15名ほどが大きなテーブルを囲んで、反省会を開きました。大埜正雄さんが開口一番「今日の敗因は長山だ。パスが俺の足もとに来ない、敵に取られるような甘いパスを出すな」と決めつけられました。何年か前、同じことを昼のロイヤル戦のとき、早稲田大名選手・監督の加納孝さんにも言われました。お二人とも万人が認める往年の名選手・名シューターですから反論は出来ません。それに現役選手に対するようなお叱りは、私がまだ使えると見てくださったものと感謝致しました。

正直なところ、私は若いときのように点と点でつなぐ鋭く正確なキックは出来ません。大きなスペースが開いて来るだろうと予測してパスを出したつもりなのです。あとは、サッカーですからスピードを出して早くボールのところに行くことが原則なのです。でも、それはいくら加齢されても神様みたいな名選手には言えません。

そのあと“ＬＢ会はどうしたら現役の力を向上させられるか”の議論になり、大埜さんが「これから毎日グラウンドへ通って東大チームのコーチをする」と言うのです。二宮さんは「そんな70歳過ぎの先輩が教えると言ったら、現役がついてこない」と対立、大口論が始まりました。

旧制水戸高校の蹴球部では年長で上級生の大埜さんが先輩、二宮さんは当然「大埜さん」とさん付けで呼んでおりました。大埜さんが戦後、軍隊から復員し東大蹴球部に入った時は３年も遅れていて、二宮さんが上級生でした。グラウンドでは二宮さんは「大埜、大埜」と呼びつけだったそうです。サッカーに関しては一歩も譲らぬ両者の激論に居並ぶ後輩達は固唾を呑んで見守るだけでした。まるで出身中学校時代の湘南中対府立五中の対抗意識を引きずっているかのようでした。

二宮泰さんの思い出

二宮泰さん

ＳＯＩ（旧制高校サッカーインターハイＯＢ組織）には旧制第一高等学校の助っ人を一回。あとは旧制浦和高校のサッカー部ＯＢ会・潮会の会員として正式に登録され、公式戦に10回くらい出場しました。浦和高校は京都大会（京都市立大グランド）の時は、静岡高校と組み浦静連合チームを編成しました。

15年くらい前、まだＳＯＩ大会が開かれていたころは、非旧制高校在籍者を排除する純潔主義のサッカーマンが散見されました。今は旧制高校在籍者の高年齢化が進みプレイをする方が少なくなり、ＳＯＩ練習会に来る人は、ほとんど旧制高校学齢（昭和７年４月１日以前の出生）より若年の人です。

ＳＯＩの練習会がよく三井浜田山グラウンドでありました。すぐ近所に住んでおられた二宮泰さんは晩年、プレイが出来なくなってからも皆と飲むのを楽しんでおられました。2006年4月27日、2年間の病気療養後亡くなられました。2006年12月11日付の封書が田園調布にお住まいになる妹様から届きました。この手紙は二宮泰さんが

サッカーに人生をかけられたことをうかがうのに充分であろうと思います。

本年も愈愈残り少なくなりまして慌しい毎日でございますが、お変わりなくお過ごしの御事と存じます。

先日はお電話を頂戴致しまし　又五中偲ぶ会の資料等私どもへすぐ御送付頂きまして　本当にありがとう存じました。

お忙しい中　大勢の方にお集りいただきました由、一生何よりも愛して居りましたサッカーの方々に思い出して頂きまして、天国でどんなにか喜んでおります事と兄に代わりまして厚く御礼申上げます。

生前も兄の頭の中はサッカーの事しかないのかしらと思う位、五中サッカー、東大サッカーと話の殆どはサッカーの事でございまして　今思いますとこれ程好きな事の持てました幸せな人生であったかしらと思ったりして居ります。

ちょうどお便りを頂きました日に偶然整理しましょうと持ち帰っておりました兄の書類の中から五中時代の写真とメモが出て参りました。何かの折提出済みの物かと思いましたが不思議な気がいたしまして焼増を頼みましたのが出来て参りましたので同封させて頂きます。

家もそのままの状態でございますが、いずれ整理を致します折、何かお役に立てそうな物が出て参りましたら、お送りさせて頂きたいと存じて居ります。

本当に親身も及ばない御親切の数々を賜りまして重ね重ね厚く御礼申上げます。

寒さ厳しくなります折り、くれぐれも御身御大切にお過ごし遊ばされます様、

遅ればせ乍ら先ずは御礼まで。

かしこ

磯部郁子

長山　樹　様

意見いろいろ

ロイヤル大会出場者は抽選で

2007 年 1 月 20 日（土）、第 1 回の「ロイヤル・オーバー 70」というイベントが霞が丘競技場で丸一日掛けてありました。第 2 回は 2008 年 1 月 19 日（土）でした。150 人の定員に対し 2007 年は 200 人、2008 年は 250 人の申し込み、その内 80 歳以上が 50 人も居たそうです。仕掛け人の小野津博好さん（府立五中・富山高・中大・ex 証券会社）はＳＯＩ練習会のグラウンド予約から会計まで一人でやってオールドサッカーマンを世話しておられる篤志家です。

出場希望者が多いので、卒業学校やクラブ、県協会などを窓口にエントリーしたサッカーマンの中から恣意的に選別して出場者を決めているようです。私は東大ＬＢチームとしてプレイしたかったので、初年度ＬＢ会幹事からの案内に即刻応じて申込みました。大会の 1 週間前になっても返事がないので小野津さんに聞いてみたら出場不許可になっておりました。小野津さんは一応私に済まないの言葉はありましたが、断りやすい人を除外したと小野津さんの弁解でした。しかし無回答はフェアプレイではないと苦言を述べました。

第 2 年度もＬＢを窓口にして申込んだら、再び外されました。

今後は、厳正に後期高齢者を優先すると共に前期高齢者は抽選で出場者を決めるべきです。70 歳以下の出場を認めて、76 歳や 77 歳を除外する根拠がなく、フェアプレイの精神に反すること甚だしいものがあります。本大会の後援者と協賛者はスタッフを送り、公正明朗な運営が出来るようお願いするところです。

公正な審判をするために

サッカー歴が長い人やサッカー好きな人なら、国際試合で時どき見られる見逃し、逆ペナルティ、過剰ペナルティなどのミスジャッジにお気づきにならないはずはありません。

多くのスポーツがもつ問題ではありますが、野球よりもサッカーのミスジャッジは勝ち負けにかかわる要素が、比べものにならぬくらい大きいのではないでしょうか。

協議のタイムをとりやすい野球や相撲と同じにはいきませんが、微妙かつ重大な反則事件発生に対して、映像と音声の記録を即時につかみ、関係者が１分以内で結論を出すようにできたら、サッカーはもっと面白くなるのではないかと思います。その手法について私は10年前、ＬＢ会総会の挨拶の際に触れました。映像は４名の審判が持つ超小型機器、スタンドからの望遠カメラとコントローラー席による統合と決定です。

主審の権限が最高に位置付けられている現状から、コントローラー席がヘッドクオーターになるということに抵抗があるでしょう。１分で結論を出さねばならぬから、音声の無線交換は不可欠です。私の考えは非現実的とのご批判が出ることは覚悟です。一度に大きなシステムを変えてしまわずに、部分的に導入し改善して行くのも好いかもしれません。少なくとも、サッカー協会、Ｊリーグの研究課題にすべきではありませんか。

ハイテク機器が日進月歩の今日だからこの程度のことは出来ないことはありませんが、使いこなすのに時間と不具合の障害発生が考えられるので、実現は関係各部門の協議・研究にゆだねなければなりません。

多分反対する人もあるでしょう。人間の感覚に限界があり、絶対を求めることは意味がない、その中でもより真実をつかむために、審判員の質を高める不断の工夫と努力を今後ともサッカー指導部門が行って行くものである、頭脳スポーツのサッカーだからこそ、機械でなく飽くまでも頭脳ジャッジでゲームの秩序を保つべきだ，それのほうがゲーム性に富み楽しいではないかと。

東早慶三大学ＯＢ対抗戦で。左から長山樹、小栗純二（慶大）、立石知也（東大）

決定力を高めるには

日本の選手の中には熟達したストライカーがいないのはなぜか？

よく得点力がなかった、決定力が不足していると言われます。

いろいろの要素のなかで、枠の中に鋭いシュートが出来るかどうかが支配的だと思います。身体が硬いとスピードのあるキックは出来ますが枠を外しやすく、身体が軟らかだと狙いは外れにくいのですがスピードが出にくくなりがちです。地を這うような鋭い球を蹴ることが出来るのは、自分の身体の移動が低速なときほど可能性がありますが、実戦においては早く走りながらライナーを蹴らねばなりません。

外国選手にそれが可能なのは、膝下が長いからでしょう。しからば短い日本人選手はどうしたらそれを補って鋭い地を這うシュートができるようになるのでしょうか。生れつき体の硬い選手が日本の代表選手の中にいます。その何人かは、たまにはライナーシュートを放ちます。だが国際試合で争うには50％以上の優れたＤＮＡが期待されます。

結局、原則に戻って平凡なことしかいえませんが、インステップキックのとき、足の上面が直線か逆ひねりになっていること、上体は前傾にして蹴ることが必要ですが、前述した様に、格闘中には理想的な姿勢を取れないことが多いので、膝から下の形と振り方でストライクが出るように練習を繰り返すべきだというのが結論です。

意識がなければいつまでたっても鋭いシュートが出来ないでしょう。果敢に打つことが出来るように、練習に練習を重ねることです。